
室外気温は90 ！？

—健—

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

室外気温は90 ！？

【Nコード】

N5988C

【作者名】

一健一

【あらすじ】

遮光ドームに包まれた東京で暮らす1万人の人々膨張した太陽のせいで外気温は90 を越えていた。そんな世界で人口削減のために恐ろしい計画が立てられていた。

プロローグ

俺は勇者”轟雄也”だ。

魔王を倒すため多くの試練を乗り越えてきた。

その旅ももうすぐ終わりそうだ。

そう！魔王の城はもうすぐそk

「起きろおおおおおおお！！！！！！！！！！」

俺の都合のいい憧れの世界は開始約60文字であっさり崩れ去った。

「まだ夜までは8時間はあるぞ！！」

ここは俺の通っている学校、今は五時間目でいつも夢の中の都合のいい世界を旅しているはずだった。

それが、新任の先公に邪魔されようとは・・・

「・・・おい、聞いているのか！」

「すみません、聞いてませんでした。」

ここで抵抗すると厄介なことになりそうだ。

「まったく、お前は大学に行く気があるのか」

教卓で竹刀を振り回している先公の愚痴を華麗にスルーして窓の外に目をやった。

外では、今日の気温と天気スピーカーから流れていた。

『今日11月26日午後二時の天気予報です。東京全土快晴、気温

は30 です。』

ああ、今日も暑いな・・・

気づいたときには俺は都合のいい世界にいた。

現実に帰ってきたときに身長が1、2cm高くなっていたのは言うまでもないだろう・・・

第一話 次の日曜に・・・

学校も終わり帰り道、俺は朝来た道を鬱満開な気分に戻っていた。仕方あるまい、暴力禁止のこのご時世で、身長が伸びるほど爽快な起こされ方をしてくれやがったからだ。

「やほー、ゆう君元気ないね」

そんな俺の気分なんてミジンコ一匹分も考慮せずに話しかけてきたのは幼馴染のテルだ、

本名は・・・えーと、思い出せない

「何ぶつぶつ言ってるの？」

「気にするな独り言だよ」

幼馴染と下校できるなんてラッキーじゃないか、鬱な気分も吹き飛ばぜ、とか言ってるモニターの前の一部の奴ら！
残念だが俺はそうはならない、
なぜなら俺は

ロリコン だからだ！！！！

「ふーんゆう君はロリコンなんだ」

「って、おい！心の声を聞くな！！」

著者ガードが甘いぞ！！！！

こんなことでは裏の話も筒抜けになって簡単に先読みができてしま

うではないか！

「そんなことよりちょっとゆう君に頼みがあるんだけど」

「そんなことでかたずけるか、まあいいか、で頼みってなんだ？」

「うん、あのね、次の日曜日に付き合ってもらいたいんだけど・・・」

「

ん、なんだこの展開は第一話目にして急展開すぎやしませんかい！？
「つきあうって、なんにだよ」

「えい・・・いかない」

「ん？何？聞こえなかったからもっかい言ってくれ」

「・・・映画のチケットがあるから一緒にいかない？」

やたらべたな展開だな、落ちまで筒抜けで手に取るようにわかるぞ

「あ、ああいいけど」

「ホント！？じゃ、じゃあ今度の日曜日に東出入り口前で待ってるから」

テルは小走りで走り去っていった。

一話目にしてもう落ちまで読める小説か、さすがといつかなんといつかこの著者は相変わらずだ。

雄也はだれに言つでもなく心の中でこんなことを思ったのであった。

第二話 待ち合わせ場所にて

色々あって、今日は土曜日

俺の身長が伸びた日が月曜日だったにもかかわらず、あつという間に週末だ。

書き手の都合で簡単に世界観が変えられる、やっぱり小説っていいなあ・・・

おい、作者聞こえてるぞ
やっぱりこの作者相変わらず適当である

待ち合わせ場所は、ドーム東側出入口

まあ、出入口口といっても半永久的に開けられることは無いであろう

死にたがりが無理やりこじ開けようとしたって話は聞いたことがあるが

自殺するんであれば90 に焼かれるよりナイフなんかを使った
ほうが幾分はいいと思うのだがな、

それからしばらく待たされた。

いつも通りだな・・・

あいつは相手が誰であろうが遅刻してくるのが普通なのであった。

本人いわく、「服とか髪とかのセットで時間がなくなっちゃうの」

と言っていたが真偽はどうだか

また待った。

十数分後

あ、来た来た

「ごめーん、お待たせ」

「なんでこんなに遅れたんだ？」

「うん、えっとね、服選んでたら遅くなっちゃった。」

「そうか」

確かに、服は良く似合っていた。

「ね、早く行こ」

「おう」

そう言つて、テルは元気良く走り出した。

確かにあれは言い訳ではなかったみたいだ
ただ・・・

テルは綺麗な服には似合わないばさばさの髪の毛を揺らしていた。

両立はできていないようだ

「ゆーくん、早くー」

「
おう」

ああ、今日も暑いなあ

雄也は、そんなことを呟きながら師走の空の下、先に見える影を追い始めた。

第三話 彼女の思いは？

映画館はそこからさほど遠くなく、走って十分くらいの位置にある映画といっても、昔作られた物を放映したり、少しリメイクをかけたやつを流しているくらいだった。

撮影する場所がないことが、新作を出せない主な原因だと聞いたことがある。

まあ、よくよく考えてみれば直径50kmほどしかないドームの中の街で作れる作品なんて、ほとんど無いだろう、5年ほど前に一度出ていたが、そのときはクレイアニメだった記憶がある。

なんてことを考えながら映画館の扉をくぐった。

テルから渡されたただ券には、軽いタッチで描かれた大きめの船と、その上を飛行するなにやら良く分からない、たこのような宇宙人と、券の下のほうに赤い字で映画のタイトルが書かれていた。

映画のタイトルは、

「タイタニックス」

がきの頃に何度か見た記憶があった。

たしかストーリーは、人間は宇宙人に地上を支配されてしまい、船の上で生きることを決意した。

それでもなんとか地上へ帰ろうとして、タイニックスという偽装空

間の内部から宇宙人の親玉を攻撃しようと試みる、
で、なんだかんだあって救世主の命と引き換えに敵を全滅させるこ
とに成功する、

が、航行中の船が氷山に激突してしまい、船が真っ二つに折れて生
存者を残さず沈没。

こんな感じだったかな、

どうやらテルはこの映画を見たことが無いらしく結構楽しみにして
いるようだったので、ネタバレをして遊ぶのはやめておいた。

映画が終わって外に出ると、もう時刻は夕刻近くなっていた。

「面白かったねー」

「あ、ああそうだな」

映画が始まってすぐ、都合のいい世界に旅立っていたことには気づ
かれていないようだ。

それから、俺はテルを家まで送っていくことになった。

というか、俺の家への帰り道の途中にテルの家があるというだけな
のだが、

テルの家に着く頃には、背景は暗闇に包まれていた。

「ありがとね、送ってくれて」

「いいよ、いつものことだろ」

小学校の頃から行き帰りは一緒だったからいまさらお礼を言われても気恥ずかしいだけだ。

「あ、あのね、、ゆうくん」

「ん？なんだ」

「うん、えつとね・・・」

しばらくの沈黙の末に、吐き出すようにこう言った。

「私、ゆうくんの彼女になりたい」

「・・・え」

唐突だった。

あまりにも唐突すぎた。

いままで友達としか見ていなかったテルが・・・

俺を・・・好き！？

「ごめん・・・急だよ、急すぎるよね、」

「・・・」

何も言えなかった。

頭の中で情報を整理するので手一杯だった。

「返事は、また今度でいいから、うん、じゃあね」

それだけ言い残すと、テルは家の中に消えていった。

見間違いか、その後姿が、少し・・・悲しげに見えた。

蒸し暑い、師走の夜のことである・・・。

第四話 満月の光の下で

それから、しばらく家には帰らなかった。

帰りたくなかった。

家に帰れば、親が「今日はどうだったの？」

とか、茶化してくることが分かっていたからである

今は、一人でいたい、

公園のベンチに寝ころがって、考えていた。

空には、ドームに映し出された満月が、美しい光で街を包み込んでいた。

ジャングルジムの上に人影が薄ぼんやりと浮かび上がった。
どうやら子供のようなものである

「ねー、ゆーくんは本物の月って見たことある？」
その内の一人がこんなことを言った。

「そんなのあるはずないよ」
ゆーくんと呼ばれたもう一つの影がこたえた。

「そっかー」

二つの影は、しばらくドームの天井に映された月と星を眺めていた。
ふいに、一つの影が言った。

「本物、見てみたいの？」

「うん、見てみたい、昔の人みたいに外に出て」

「じゃあ、俺が見せてやるよ！本物の月！」

「でも、どうやって見るの？外には出られないよ」

「簡単さ、俺が大人になったら外の気温を普通の温度に変えてやる」

「そんなことできるのー？」

「それは・・・わかんないけどさ、でも、何とかなる気がするんだ」

「じゃあ、大人になったら本当の月を見せてね」

「まかせとけ！ー！」

いつの間にか寝てしまったらしい・・・

やたら懐かしい記憶がよみがえった。

そういえば、そんな約束したんだな・・・

雄也は、輝く月に背を向けて、家へと歩みを進めた。

美しく、それゆえに孤高な月は、悲しげな光を放ちながら雲の内側へと吸い込まれていった。

それは、本物ではない自分が見上げられるのを躊躇ったかのように・・・

第五話 終わりの始まり

翌日、雄也は一つの手紙を書いた。

内容は、

午後9時、あの約束の公園で・・・

正直なところ、テルへの返事は告白を受けたときにもう決まっていた。

いや、それよりずっと前から決まっていた気がする

テルに直接渡そうと思ったが、さすがに気まずくなってしまうので、郵便受けに放り込んでおいた。

学校であつたテルはいつもの調子だった。

昨日のことが、なかったことのように元気だった。

しかし、時々ボーっとしていたり、何かを必死で振り払おうとしているように雄也の目に映った。

学校が終わり、家に帰ってからすることもなかったので遠回りして家に帰ることにした。

無意識的に、テルと出会いたくなかったのだらう、

それから夜まではいつもと変わりなかった。

夜の公園は静かすぎた。
聞こえてくるのは耳をかすめる風の音と、いやに高鳴っている自分の心音

約束の時間まで後三十分と少し
そのとき、公園に来て初めて別の音があった。

砂利の上を走る車の音
車は雄也の居るベンチの前に来ると土煙を上げながら荒々しく止まった。

車から降りてきたのは五・六人の警官。

一番年配と思われる人物が雄也に向かって来た。

そして、こう言いはなった。

「轟雄也！あなたを春日光氏殺害の疑いで逮捕する！」

「な、なんだって！！？」

驚いている雄也をよそに、懷から取り出した逮捕礼状を雄也に見せ、
うむを言わず雄也を車に詰め込んだ。

「おい！わけわかんねえこと言ってんじゃねえよ！！」

「黙っている！！証拠はそろっているんだ！！！」

そんな馬鹿な、俺は今まで普通の日常を送ってきたはずだ。

俺が知らないうちに違う人格が現れたとかオカルトなこと言うんじゃないだろうな、

車は走ること20分ほど、

着いたのはこの国の最高機関の一つである、最高裁判所だった。

そこからは、目隠しをされていたので建物の内部がどうなっていたかは分からない
たぶん、脱走したときのために出口までの道のりを覚えさせないようにするためであろっ。

歩くこと10分

約束の時刻だ。

5つ目のドアに入ったところで目隠しをはずされた。

そこは、こじんまりとした部屋で、奥に大きめの机が一つと手前にソファアが置いてあるだけだった。

座れと指示をされ、先客が三人ほどいるソファアに腰掛けた。

机に座っていた貫禄と威圧感を持つ男が厳しい目つきで四人をいちべつすると、

「君ら四人は、死刑だ。言っておくがこれは何をしようと覆ることはない、覚えておきたまえ」

こう言った……………

俺たちの死が決まった日も月は何事も無いように、光り輝いていた。

これが終わりの宣告ではなく、始まりの宣言であることが分かったのは、もう少し先の話になる・・・

第六話 死刑囚の顔ぶれと・・・（前書き）

今回は、本文すべての書き直しをさせていただきました。

これからは、なるべくこのようなことが無いように気をつけていきたいと思います。

申し訳ありませんでした。

第六話 死刑囚の顔ぶれと・・・

俺たちの死刑執行日が決まるまでの間、俺たちは同じ牢屋に閉じ込められた。

牢屋といっても、床から壁から冷たい石だったり、鉄の棒を縦に並べた扉だったり、窓があっても小さいはめごろしの窓だったり、そんなことは無く、普通の部屋より豪勢な感じがするような部屋だった。

俺らが逃げるとかは考えに入れていないようだ。

「じゃあ、まず自己紹介をしようか」

そう言い出したのは、薄黄色に変色した白衣を身に着けている、20代後半といったところの男性だった

「僕は、一賢二はじめけんじ見て分かんと思うけど科学者だよ、生物学専門のね」

「さて、次はそのお姉さんにしてもらおうか」

それを聞いたお姉さんと呼ばれた女性が、面倒くさそうに口を開いた。

その女性は、一般人が言うところの美人になるらしい

あかさかみやこ

「赤坂都子だ、特に言うことは無い」

「うん、じゃあ次はその君」

賢二の目は俺に向けられていた。

俺は名前だけ言うと、次に話すであろう小さな影に目を向けた。

次の瞬間、俺の心臓には矢が刺さっていた。

そう、天使が放った恋の矢が

そこに居たのは、俺の好きなタイプど真ん中な口りっ子であった。

いつの間にか俺と彼女の周りには見たことも無い美しい花が咲き乱れていた。

少女は一瞬俺と目をあわせると、恥ずかしそうに目を伏せた。

「えー、じゃあ最後にお願ひできるかな」

俺を現実に戻したのは、賢二の野郎だった。
ええい、くそ、忌々しい

少女は、若干緊張しながら立ち上がった。

そのしぐさ一つ一つが俺の心をくすぐる

「古谷ふるたにさよです。あの・・・えっと、その・・・」

「ああ、うん、ありがとうね」

「は、はい」

これで、全員の自己紹介が終了したわけだが、さよちゃんに話しかけようかと思っただが、さすがに疲れているようなので俺は都合のいい世界に旅立つことにした。

深夜の公園、月光に包まれた一つの影があった。

その影は、徐々に傾いていく月を見上げていた。

雲の隙間から顔を覗かせていた月は、その影を守ろうとするように、より強く光を発していた。

第七話 奇妙な違和感（前書き）

投稿がずいぶん遅れてしまいました。
申し訳ありません

第七話 奇妙な違和感

俺が、都合のいい世界から舞い戻ってきたのは、次の日の朝5時30分だった。

ずいぶん早いのは、普段は深夜 時ぐらいまで起きているせいだろう。

「・・・二度寝するか」

「おや、轟君、早いね」

そんなことをいい笑顔で言ってきたのは、・・・えーと、そう、—
はじめ

「朝は強いほうなのかい？」

「いや、普段はKO負けですよ」

「はっはっはそうかそうか」

そんなことを言いながら、机の上に置かれたトーストをほうばると、
ん？トースト？

「あれ？一さんそれって」

「ん？トーストだよ・・・もしかして轟君は食べたこと無い！
？」

「いや、ありますよ、ですからそのかわいそうな人を見るような目はやめてください。」

「はっはっは、そうだな、いや、すまんすまん」

トーストを優雅にほうばりながら、新聞を読む、笑顔が似合う男が一人

これだけ見ると、どっかのボンボンに見えてしまうから不思議である
まあ、そのすべてを薄汚れた白衣が台無しにしていたが

「一さんは、この茶番についてどう考えていますか」

「そうだねえ、僕たちが本当に死刑囚だと考えると、この待遇は少し違和感を覚えるよ」

そこからしばらく静かになった。

俺が考えていたのは、死刑の方法、警察の本当の目的、茶番に付き合わされた仲間のこと、そしてテルのこと・・・

それから、夕方までは、自分の家に居るような感じがした。

まあ、和みの対象が確立されていたおかげなのだろう、

しかし、そんな時間も長くは続かないのが、世の理ことわりと言つものなのであろう

午後5時ごろ、暇になったので、さよちゃんとトランプでもしようかと考えていたときに警官が入ってきた。

ちなみに、このトランプもこの部屋の中にあつたものである。

「お前たちの死刑日が決定した。」

そういえば、俺らは死刑囚だったんだ、忘れていた。

「今日の午後10時だ」

「「今日!!!?」」

俺と同時に赤坂さんが叫んでいた。

「死刑方法すら聞かされていないというのに、今日とはずいぶん急じゃないですか」

そう言った一さんに返ってきた言葉は

「死刑方法は、遮光ドームの外に出てもらう、しかし、そのときに一つ仕事をしてもらう」
扉が荒々しく閉められた。

「妙ですねえ」

一さんはそう言いながら、口元に微笑を浮かべていた。

その日の月は、きれいな満月だった。

しかし、ずいぶん光り方が弱々しくなったように感じた。

薄雲に覆われた月は、消えかけの蠟燭のように揺らめきながら、雲の下へ消えていった。

第八話 本物

さて、この部屋にかけてある大きな柱時計が正しい時間を刻んでい
るとしたら現在午後9時をまわったところである。

死刑執行まであと1時間

さすがに皆もへらへら笑ってはいられなくなってきたようだ。

赤坂さんはさつきから部屋の中を歩き回っている、落ち着かないの
だろう

さよちゃん椅子に座って心配そうな顔でうつむいている、これか
ら死刑になってしまうのだ暗くなるのは仕方ない

一さんは、……どこから出てきたのか、分厚い本を読みな
がら紅茶を優雅に楽しんでいた。

しかし、紅茶のパックなんて置いてあつただろうか、

そして俺は、なんだかいつもより落ち着いている、変な感じだ。

これから死刑になると分かっているのに、他人のことを心配する余
裕まである

死が怖くないわけではない、むしろ恐れている、

天国や地獄などという都合のいい世界があるわけないし、ましてや
幽霊になってこの世界を漂うなんて、そんなのもつとばかげてる
死の後にある世界は永久の暗闇、もっともそのとき感覚なんてもの
は無くなってしまっているので怖いとかそんな余分な感情は無いの
だろう

俺は10時になるまで誰とも会話しなかった。

午後10時

扉が開く

「時間だ」

俺たちはまた目隠しをされて外まで連行された。

到着した場所は

ドーム東側出入口

暗闇の中、扉が音も無く開くと、何も無い部屋が一つ顔を出した。

「これを一つずつ持っていけ」

警官が手にしていたものは、一辺が5cmほどの小さな箱だった。

「この先にもう一つ部屋がある、そこでその箱を開けろ、説明はすべてその中だ」

そう言うと、扉を開けて、街へと戻っていった。

「っち、やっぱりダメか」

赤坂さんが街側の扉を開けようとしていた。

「さて、これで僕たちが取れる行動は前に進むことだけになったようですね」

「一さん、なんでちょっとうれしそうな顔してるんですか」

「んー、そう見えます?」

俺^{たち}が深くうなずくと「そんなあ」と言つてわざとらしく悲しそうな顔をしながら、先へと進んでいった。

先の部屋も前の部屋と大きさや内装に変わりは無かったが、部屋の温度が確実にあがっているのが分かった。

警官に渡された箱を開けると、中からは・・・という仕組みなのだろうか、絶対に入らない大きさのはずなのだが・・・耐熱スーツと、小さなメモと、渡された箱と同じ箱が入っていた。

メモには、この部屋で耐熱スーツを着用して外に出ろ、その後、出口すぐ右にある梯子を上り、ドームの上で、中に入っていた箱を開ける、

こう書いてあった。

「従うほかは・・・ありませんねえ」
「やっぱりうれしそうだ。」

外に出ると、思いのほかそんなには暑いと感じられなかった。

梯子を上り、頂上に着くまで30分もかかった。
さすがに大きい

頂上からは、月がよく見えた。

「あれが本物か・・・」

その月は、ドームに映し出された月の10分の1ほどの大きさだったが、

手を伸ばせば触ることができるような気がするほど、

とても大きな存在感を持っていた。

雲一つ無い 深い 深い 空の中に 純白のつきが 輝いていた。

第九話 スタートライン

さて、頂上に着いた俺たちにできることは箱を開けること、

中からは、頂上付近に点在している、高さ1.8m直径1.5mほどの半円型で半透明な、太陽光パネルと、小さなメモが一つ

パネルを、露出しているコードに繋げ
と、書かれたメモだった。

ドームの頂上には、白い粉が大量にあった。

俺たちは、お互いを見ることも気にすることもなくパネルをつけた。

全員つけ終わると、誰の指示でもなくまた頂上に全員が集まった。

「これで、私たちの最後の仕事が終わったわけですか、なんだかあ
つけないですねえ」

「くそ!!こんなあつさり終わってたまるか!!」

「・・・一さん、何か助かる方法は無いですか？」

一さんは肩をすくめて首を振った。

「そうだ、皆さん、この白いものはなんだかお分かりですか？」

一さんはその場にあった白い粉を手にとった。

「砂・・・？」

「実はですねえ、これ、人骨なんですよ」

「なっ！！」「え！？」「・・・。」

「おや？雄也君は驚きませんか？」

「うすうす、感じていました。この街の人口増加は近年始まった事ではないと聞いていましたし、僕たちみたいに理不尽な計画に巻き込まれた人たちがいても不思議ではないと」

「雄也君は頭の回転がいいですねえ、そこまで気づいてしまうとは、」

「その言い方ですと、一さんは初めから計画の内容を知っていたんですね」

「初めからではありませんでしたけどね」

「この計画は、今から１００年前に始まりました。その頃、この街は人が溢れパンク寸前だったと、書かれていました。」

「一さんは懷から牢屋で読んでいた分厚い本を取り出した。

「人口が増えるにつれて、深刻な電力不足にみまわれたそうです。

それらを一度で解決する方法、それがこの計画です。」

「一ヶ月に４人、一年で２８人、この街で一年に産まれる子供の数は年間約１８人、確実に数を減らすことができるというわけです。」

「さらに、死刑囚にこの太陽光パネルを設置させることで、電力不足もまかになった。いやはや、非人道的ではありますががなかなかの良策ですねえ、」

「……。」

「ああ、そうそう、死刑囚はくじ引きで選ばれていたみたいですよ、国民投票という形だね」

「酷すぎる」

「ですが、それが事実です。現に我々もこうして同じ道を辿っている」

「……本当に……どうしようも……ないのか」

「いいえ、一つだけ方法があります。」

「ほ、本当か!!」

「ですが、これはかなり分の悪い賭けです。いや、当たり前なんて無いかもしれない、ここで焼け死んだほうがよかった、と思うかもしれません」

「それでも聞きますか？」

「聞いてやるさ」

俺は、後ろに居た二人を見た。

「あたしも、聞くほうに賛成だな、人間やらずに後悔するよりやって後悔しろって言うしな」

「わ、私も、聞きたい……です。」

「満場一致だ。」

「さんは微笑を作り出し

「そうだと思いますよ」

と、言った。

「簡潔に申し上げます。ここから脱走します。」

「まずこれを見てください、」

「さんが取り出したのは、あの小さな箱だった。

「この中には、さらに箱が4つ入っています。一つ目には食料、二つ目にはキャンプ用品、三つ目には水、そして四つ目には武器が入っています。」

「さん……どこでそんなものを……。」

「あの豪華な牢獄にすべて入っていましたよ」

「武器まであったのか……」

「でもよ、暑さはどうするんだよ、クーラーの電池はもう一時間とないぞ」

「それは、あれを使いましょう」

「さんの指差す方向には円形の太陽光パネルがあった。

「あれを、電池代わりにすれば、雨の降らないここならば半永久的

に作動可能です。」

「あ、あの、でも、逃げる方向が分からないと、だめなんじゃ・・
」

「それも、心配御無用ですよ。それもこの本に書いてありました。
昔ここから真西に行つたとこのに、氷結洞窟があつたそうです。上
手くいけばそこがまだあるかもしれません」

「さて、行くかやめるか答えは一つ、今ならまだ引き返せますよ」

「ここまできて引く奴はいないだろ」「そ、そうです。行きましょ
う」「あたしの人生は死を待つようなつまらないものじゃないさ」

最後に一さんがこう言った。

「そう言ってくれると思っていました。」

闇のなかに輝く月は、だいぶ傾いてきていた。

その、傾きが増せば増すほど、月は東から昇る太陽に、輝きを奪わ
れていった。

そんな中、俺たちは、ようやくスタートを切つたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5988c/>

室外気温は90 !?

2010年10月10日14時31分発行